

京鹿子



昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十七年十月一日発行
通巻九七四号（毎月一回一日発行）

10月号

盆近し
丸山佳子

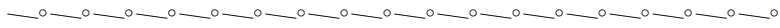
エレベーターに防犯カメラが暑気払ふ

標高千スピード落せとかなかなが

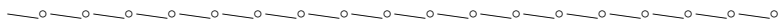
関ヶ原立つ這ふ草のいま青実

展望台の並では揺れぬ藤太実





天 秤 で 計 れ ぬ 日 吉 ダ ム の 涼
返 り 花 一 枝 ど う ぞ と 言 は れ て も
早 坂 な い 物 ね だ り し て 下 る
ふ り 返 る こ と 止 め ま し た 蚊 帳 吊 草
か な か な に 防 火 用 水 満 た さ れ よ
盆 近 し 仏 迎 へ の 雲 か 離 々



清響集
豊田都峰
その五十四



すき間をば万緑に埋め備へとす
空 蝉の風をあをさにこはれけり
空 蝉に憑かれてよりの耳鳴か
蜥 蜴消ゆ山の木洩れの斑を残し
首塚へ磯の涼風たてまつる

ひぐらしのこだま鳴きして山明くる
木洩れ日のゆらぎに秋のひそみゐて
雲ばかりあふれさせゐて世は残暑
手をあげて別れしよりの夕かなかな
夕風の草に立ちゐる盆のころ
墓の径ことしも会ひ得し赤のまま
橋ひとつ渡ればともり西鶴忌
ねこじやらし夕日をためてひと遊び

秀華採集

卵殻の思はぬ薄さ桜桃忌

木戸 渥子

桜桃忌は太宰治の忌日。『斜陽』『人間失格』など人間存在の苦悩を道化の中に追求。若き日に芥川龍之介の自殺に衝撃をうけており、彼も昭和二十三年に入水自殺して、絶筆『グッドバイ』を地で行く。そんな太宰を鮮やかに比喻していると評価したい。

蜥蜴這ふ庭石ずうつと太古なり

伊藤 希眸

海響は母が呼ぶ声白日傘

沼田 巴字

前句、蜥蜴のいる庭石にふと太古をイメージする、その連想性。庭石は原始の大地となるという計算。後句、ただひとつ「白日傘」を置く舞台装置。今月の三人は個性的な面が出ている。

鈴鹿 仁

秋 茜

仏心や池の平らの秋茜
しなやかに影は景もち秋ともし
灯下親し僧の浄机にある一書
すだちの香一村の富自恃とせり
甲冑の髭食ひ反らす残暑かな
赤とんぼ少女の駆けるあかい橋
下り籜わし掴む手を鉄拳と

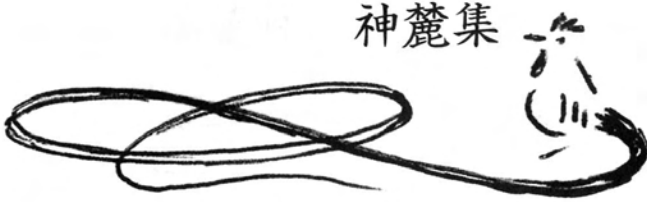
近 詠

宇都宮滴水

鮎の里

鮎青し里は朝日のまんなかに
錆ぶるまでうら側見せず若き鮎
囀り鮎ならうことなら下りたし
落書の誤字の一つに夏残る
終章はあつて無きもの崩れ籜
おはぐろの黒は悼みか指定席
人尋めて二百十日の峠越ゆ

神麓集



堺のまち 山田をがたま
利久井近き一斤蕎麦の麻のれん
望郷に泣きし蘇鉄の老いて咲く
海鳴りを耳朶に歌碑訪ふ梅雨晴間
巨大詩碑より抜け出し蝶ぞ海へ翔つ
公武の信篤き宮居の茂り濃き

舩越 美喜

亡き父母の思ひ出話す葭障子
久闊の糸口ほぐれ冷さうめん
川向ふ雲掃いてゐる夏木立
手を握るのみのお見舞青葉窓
ひつそりと門を閉ざせり百日紅

西壁と塀の間あはのしぼり風 奥村 鷹尾
暗渠出て伏見疏水の涼み川
紅睡蓮逢瀬束の間別れけり
螢火やこの世し残す何も無し
娘も孫も妻の声に似氷菓舐む

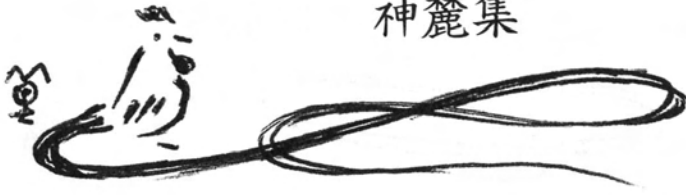
今朝の秋 大塚 まや
髪束ねをれば風過ぐ今朝の秋
父と兄早く逝きたり萩芒
FAXの文字薄れゆく十三夜
買ひ替へて同じかたちの夏帽子
新蕎麦やダイエツトとは無関係

岩崎 憲二

海山の四温返さず最早や初夏
苔清水屋もこぐらき岩不動
単衣着て鏡に亡母の姿みる
初夏に入る道行く人の白くなり
梅を干す亡母の姿が眼なうらに

凌霄花 柴田 朱美
凌霄花もたれてみたき刻がある
手文庫に忌日があふれ凌霄花
夢売りに夢買ふ女凌霄花
家系図のその先不明凌霄花
むかし下駄屋路地の凌霄よく伸びる

神麓集



空蟬の骸に重たき命あり
 空蟬の弧高保てり蟬時雨
 燈籠に縋り空蟬華やげる
 夏瘦の胸を素直に笑ひけり
 帷子の折目正しき端坐なり

高木 智

六月の退屈
 沙羅の花見上ぐるひとの口の紅
 過ぎて行くひとの靴音沙羅の花
 父の日の父澁刺に児童画展
 水をまく三味線教室始業前
 六月の退屈凌ぎに犬が吠ゆ

森津 三郎

うたかたとなりぬ旅の日沙羅の雨
 ももいろに透く耳朶濡らす半夏雨
 苔清水末は名水いづこの井
 迷ひつつ瀬見の川辺を翔つ螢
 朝顔は亡母の形代うすむらさき

荻野 千枝

夏の山
 一匹の蚊に六畳の乱気流
 夏山を背負ひし寺の火乃用心
 飴色の吊り橋夏の山ゆるる
 岩となるつもりは蜥蜴遊び下
 国宝のかけらの緋鯉息つがず

丸井 巴水

紅木槿他言無用の筆穂散り
 草いきれ下流うすれの土手に出る
 蟬木蔭貧乏ゆすり強ひられる
 炎天を足音気にせぬ靴で訪ふ
 女郎蜘蛛の湖を制する巢の構へ

松本 鷹根

姉三人
 梅雨霞こんと過ぎたるきつね坂
 汲み置きの水おもたかり吉符入り
 紺朝顔京都育ちの自負すこし
 姉三人海芋の眞白に似ておもし
 黒日傘眉うごかさぬおんなかな

北川 孝子



京鹿子集

豊田都峰選

卵殻の思はぬ薄さ桜桃忌

男梅雨馬穴に穴があいてゐる

結石のひそかに育つ女梅雨

虹消えて風船かづらほどの悔

水尾を曳くブリキの戦艦敗戦忌

鹿の子駆けて大地をおのがものとせり

海響は母が呼ぶ声白日全

河口とはふくるるところ麦の秋

鳥籠に似たランタンや夏木立

紫陽花やおしやべり舌につばさ生え

この家に揚羽の生む木見つからぬ

京都 木戸 渥子

奈良 沼田 巴字

千葉 伊藤 希眸

金魚玉鳴りだしさうな闇一枚

青柿や表札のずれそのままに

蜥蜴這ふ庭石ずうつと太古なり

かにかくに虹の大橋わたりきる

茫茫と八十近し男梅雨

青嵐もの忘れなど気にとめず

認知症白豊かなるかすみ草

そら豆のふくみ笑ひの女神たち

恐竜展閉ちて卵の花散り易し

天界に滯あるごとく梅雨の鶯

七月の雨シヤガールの青き渦

河内 桜人

佐々木紗知